

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ③エル・リンダマン



完全無欠のチャンピオンだとは思っていないので、そこに山があったら登る

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」エントリー選手インタビューの第3弾は、エル・リンダマンが登場。G-REX王者として優勝が宿命づけられている中、どのような姿勢で臨むのかを訊いたところ、自身と団体に対する俯瞰的な見方が随所に表れた。(聞き手・鈴木健.txt)



僕も河上も五角形グラフの外に強さがある。僕は彼を信じます

——試合の方はすでにおこなわれていますが、G-REX王座という最高峰のシングルのベルトを保持しながら、4・12新宿で田中稔選手のG-RUSH王座挑戦を表明した理由からお聞かせください。

リンダマン わかりやすくって言うんですかね、陽の目を浴びる人みたいなものはやっぱり必要だと思って。GLEATにおいてベルトを何本も持っている、トーナメントを優勝するという提示の仕方が一番手っ取り早い。ファンの人たちが「この人が一番」というのを軸にする一つの基準点を作りたかったんです。その基準点としての強さ、高さ、深さを出すには、全部のベルトをまとめて獲るのがいいと。

——では、G-RUSHも獲った上でG-CLASSも制覇するという道筋を立てていたんですね。

リンダマン そうです。

——最高峰のタイトルを保持していれば、ほかのベルトを狙う必要はないと思っていたので、あのアピールには意表を突かれたんです。



リングマン G-RUSHに関してはあのルールの中で基本的には若くてスタミナがあって、スピードがある人が有利なタイトルですよね。だから、そういう選手がいくべきだと思っていて。ベテランっていうのはG-RUSHのわかりやすい、速い、スリリングというところでは若い人の方が表現しやすいわけじゃないですか。だから、ほぼ最年長者の人が持っている状況っていうのはわかりにくいかなと。G-RUSHというもののわかりやすさですよね。

——それを今の自分なら体現できると。

リングマン はい、まだ若いですから。スタミナとか見ればわかってもらえると思いますけど。

——ただ、王座奪取はならないままトーナメントへ臨むことになりました。これもG-REX王者であることを思えば出場することなく、高みの見物を決めようと思えばできる立場だったわけで、チャンピオンでありながらこの中へ入れられたことに関しては、どう受け止めているのでしょうか。

リングマン 自分は完全無欠のチャンピオンだとは思っていないんで。ただベルトを持っているだけですよ、言ってしまうと。

——そのような自己評価なんですね。

リングマン なので、そこに山があったら登るし、強くなろうとする気持ちや勝って積み上げていこう、高くなっていこう、大きくなっていこうっていう気持ちを僕はプロレスラーとして見せたいんで、そこにトーナメントというものがあるのであれば登っていきます。

——チャンピオンとして出場すると、優勝が義務づけられる見方をされます。

リングマン そうですね。じゃあここで優勝して、どうやって話が面白く回っていくかってことだと思います。これもわかりやすい形で言うと、チャンピオンがトーナメントで負けて、優勝者が7月1日のビッグマッチで挑戦というのが一番わかりやすい。だからリングマンが負けることも、わかりやすさでいったら正しいとも言える、団体からしたらね。僕が優勝することで転がりにくくなるというデメリットが生じる。ビッグマッチを前にしてチャレンジャー不在にな

るわけですから。そのデメリットを潰す方法として、やっぱり“外”になってくる。なので、わかりやすさを潰した上での外っていうのも考えられるんじゃないかなと思っています。

——今の時点で、GLEATの外にもアンテナを張っているということですか。

リングマン アンテナを張っているとは言わないですけど、どんな選手が来てもその人にとって名前が上がるような試合にする自信はあります。僕は今までもG-REX王者としてDOUKI選手とやったし(2022年8月24日、後樂園ホール)、TJP選手ともやらせてもらいましたけど(2025年12月30日、新宿FACE)、いずれもわかりやすく名前のある選手ではなかったというか、実力はあるけど一歩引いた状況にある人たちだったと思うんです。でもその2試合はいいモノにしたっていう自信があるし、DOUKIさんが上がるきっかけとまでは言わないけど、確実にあそこから上がり目になったと思っていて。TJP選手の場合は、あれ以上の上がり目ってなんだってなるけど、彼は彼で「やっぱりTJPって凄いんだな」ってGLEATで見たお客さんがわかるような試合をやったと思うんです。うん、お互いが上がればいいじゃないですか。それが理想です。だから、自分がトーナメントに優勝して、そういうGLEATの外も視野に入れて7月1日に向かうというのが、一番難しいながらも理想の形。それって、どこかに所属していてもフリーであってもその団体的に実力はあるけれどももっと上げたいと思っている選手をポンって出したら、上げる方も魅力的な団体に映る。それだったら交流しようとか、そういう話になってくると思う。まあ、それはすべて試合を通じてのものですけど、僕は誰かを潰して自分が上がるというのはあまり考えないんで。もちろん、そこに勝ち負けはつきますけどね。——仮に自分が優勝できなかったら、優勝者と7月1日にやるつもりではいるんですね。

リングマン 既定路線だと思うし、それを発言するのが優勝者の仕事でしょ。そうなったら、よっぽどのことがない限り受け入れますよ。时期的に見ても7月1日がベストだと思うし。

——トーナメントですが、1回戦の相手である山村武寛選手とは長きにわたる関係性を築いてきています。その選手とこのタイミングで1対1で対戦することに関しては、どうでしょう。

リングマン それこそ、実力があるのに上がりきってない最たる例が山村だと思います。外の選手の名前ばかり出して申し訳ないけど、DOUKI選手もTJP選手も対戦した時点で僕より実力があつたと思うんです。今回の山村も同じことが言える。僕は、実力がないと思っていますから。

——そんなことはないでしょう。

リングマン 根性でなんとかしている。実質的なスキルでいったらパワーがめちゃくちゃ強いわけでもない。言うなれば、力を一番発揮できるようにゲームを持っていくのはうまいかもしれないですけど、強さやスピードで一番かといったら、勝てるところがあまりないんですよ。山村と僕のどっちがスタミナあるかっていったら、僕が一番自信のあるところですら怪しい話です。

——ものすごく俯瞰で見えていますね。以前からそうでしたっけ？

リングマン そうですよ。その上で、持っている武器で闘うしかない。普通に考えたら、山村に負けますよ。パラメーターでいったら…五角形のグラフで見比べたら、明らかに向こうの勝ち。

——その前提が自分の中にある状態で闘うと。

リングマン パラメーターで勝てるかなと思えるのは…河上ぐらいかな。でも、河上を見てもらったらわかりますけどパラメーター外のところが強くないですか。五角形の外に彼の強さがある。

——不気味ですね。

リングマン だから彼の怖さもよくわかります。僕もパラメーター外で結果を引っ張ってききましたから。

——河上選手といえば、2・11後楽園でああいうことがあって、その場ですんなりと受け入れられたんですか。

リングマン 僕は信じたいっすよね、どんな人でも。だって、信じて裏切られた方が全然いいもん。疑心暗鬼になって、疑いながらつきあっていく方が僕はムダだなって思っちゃうんで。それなら最初からさわらない。僕がさわった時点で一定信じています。

——シチュエーション的に誰よりも先に信じるか否かを判断しなければならなかったじゃないですか。その瞬間の判断で受け入れようとなったわけですか。

リングマン はい。過去にどんなことをやっていようとも人は変わりますから。その可能性を否定しちゃったら、生きている意味がないですよ。自分が成長しないって言っているようなもんじゃないですか。それって哀しくないですか？

——哀しいです。

リングマン 人は変わらないって、あえて言い切っちゃうけど、それでも変わろうとする人の可能性を絶対に否定はしたくない。

——そこまで信じてもらえて、河上選手は嬉しかったらうなあ。

リングマン 信じてくれない人もいると思うけど、それは今までやってきたことがあるからなので、頑張っってその人たちを納得させるしかないですよ。

——伊藤選手にはシュークリーム、石田選手にはケーキを振る舞ったのに対し、リングマン選手には何もやらずとも信じてもらえるなんて…。

リングマン 僕はむしろ、そういうわかりやすいものには釣られないですから。そういうのに関係なく信じてこそじゃないですか。

——それで1度チームを組んでみて感触は？

リングマン 息が合っているかはわからないけど、心地はいいです。楽しくプロレスができるから。

——両者とも決勝に上がれば対戦することになります。

リングマン 明るくなった河上がちゃんとシングル戦線でやるのって今回が初めてなんで、試されるトーナメントになるでしょうから、決勝戦までにシングルの形ができあがっていればいいですよ。それは2月の後楽園でやった河上とは別の河上だと思うんで、その上でもっといいモノを作れる自信がある。



逆をいていた自分が本流に 闘いを挑んでいかなきゃいけない

——その河上選手がいるブロックは誰が勝ち上がってくると予想しますか。

リンダマン どうですかね…田村って言うのがいいのかなと思っちゃいますけど。

——いいのかなとは？

リンダマン 元気がよくてわかりやすい。

——それは自分が対戦する上でのいいなのか、それとも見る側の視点でいいなのか。

リンダマン 見る側としてのインパクトがあります。僕の好きなプロレスラーの形だから。大きくて速くて強そうで。

——それだけに、相手にすると大変です。

リンダマン それは仕方がない。自分の選んだ仕事だから。やれる自信もあるし。

——ブラスナックルJUNはどう映っていますか。

リンダマン 彼は彼で今、楽しくてやっていますけど、それってお客さんに対して、周囲に対して自由にやっているっていう表現ですよ。それを見せるために、いろんなことをすごく考えていると思います。その中で結果もついてきているので、今のところは一応成功していると思うんですけど、いつ崩れるかわからないっていうのは心の奥底にあるんじゃないかって想像しちゃいます。

——崩れるというのは、自分の描いていた通りいかなくなるという意味で？

リンダマン そうそう。いかななくなった時に、メチャクチャ考えると思います。だから今の時点でも考えてやっている。立場が変わっちゃいましたからね。要はステージチェンジした時に、今までとはやり方を変えなきゃいけない。凶器を使うのも表現方法の一つだから、ルール内でやればいい。ダメだって言われてもやるんだから。

——見る側からすれば誰と誰が当たっても楽しみな8名です。

リンダマン 本当に、いい8人だと思いますよ。誰に対してもやりたいと思えるし、誰とやっても負けるかもしれないって思うから緊張感もある。その中で僕は2つの線があるわけじゃないですか。優勝した場合とできなかった場合の両方で7月1日のタイトルマッチが約束されているようなものだから。実はほかの7人が負けた場合の線がないんですよ。そういう意味でのリスク、緊張



感があるんじゃないですか。

——10月9日に中嶋勝彦選手からG-REX王座を奪回して、半年間保持し続けてきました。その中で見えてきたものはありますか。

リングマン いや、そこは2回目なんで大きくは変わらないです。

——立場としては最高峰にいるわけですから、それ相応のものが求められるじゃないですか。そこに応えられているという感触は？

リングマン もちろん、応えられていると思います。

——ファンの支持、ありますもんね。

リングマン ファンの支持…リングマンのことを好きか嫌いかっていうのはわからないので、支持を得ているスーパースターみたいな気持ちは自分にはないです。ただ、納得はしてくれていると思う。安心感のようなもので存在している気がします。とりあえずリングマンに任せておけば大丈夫みたいな空気は感じます。

——でも、それこそが信頼されていることなのでは。

リングマン 花形ではないかもしれないです。

——信頼されるのがマストじゃないですか。

リングマン そこは、その人のタイプにもよるんじゃないですか。それを持ち得てはいても、わかりやすいスターであったり花形だったりを獲るためのG-RUSHでもあったんです。だから、これからがリングマンに足りていない花形、スター、中心とされるものを獲りにいくための闘いです。

——今の自分はスター、中心とは違うという認識なんですね。

リングマン そうですね、あえて逆を言っている自覚があるというか、そうやって勝ってきた人間なんで。コスチュームも髪型もそうですけど、みんながそっちにいつているんだったら逆の方が光るでしょっていうやり方で僕はやってきた。自分の思想みたいなものがそもそもみんなとは逆をいつているところも一つの要因ではあるんですけどね。だからこそ、いよいよここから本流にいつてスターを目指す人たち、キラキラした人たちの中に正面切つて闘いを挑んでいかなきゃいけないっていう怖さがあります。でも、そこを超えたら自分もキラキラできる。

——目指すんですね。

リングマン そこから目を背けるのはいけないと思います。

——リングマン選手は今、自分が団体のエースという認識はされていないのですか。

リングマン エースか…みんながどう思っているかですね。自分は、ないです。チャンピオンだけど、エースではない。でもベルトを持つことで象徴にはなれている。エースを獲りにいくために必要なものを獲ろうとはしていますが、まだ到達はしていない。本当に、はじめの一步ですよ、まだ。

——7月1日で5周年を迎えるGLEATですが、団体の現状はどのように映っていますか。

リングマン 普通です。良くも悪くもないです。

——山あり谷ではなく、平坦な感じですか。

リングマン 山谷があるように見えて、僕にはそう映っていないです。良くも悪くもないからまさに平均値。変化をしていないという点では悪いのかもしれないけど。

——でも、変化は求めていますよね。

リングマン 向上する上での変化はね。その意味では微増はある。だけど喜べるほどの微増ではない。

——TJP選手とやった昨年末の新宿FACE大会では、熱量が上がったなと感じました。

リングマン うん。でも、それも含めての平均値だと思っているので。あれぐらいのものは作れると思っている。成長したから作れたわけでもないし、要は

運とか時勢の範囲内で持っている実力が、上振れることもあるし下振れることもあるにすぎないという感覚です。

——それを飛躍的に上げていくためにするべきことはつかめていますか。

リンダマン そこは団体としての実力が上がれば上振れの範囲も大きくなりますし、下振れの加減も抑えられる。悪い時でもそんなに悪くないまでにとどめられるんで、本質的に実力をしっかりつけていくことだと思います。

35歳までは可能性がゼロになってもGLEATで続ける

——ただ、旗揚げから5年の時間を費やしてきているだけに、何かしらの形を提示する段階には来ていると思うんです。

リンダマン 形として提示する…たとえば、ほかの団体でいったら何があるんですか。

——例をあげると大会場を満員にするとか、業界的にも大きな話題性であったりとかですかね。

リンダマン うんうん。結局はGLEATの個性たるものを何か見せろってことですよね。それでいうと、大会場満員ってまったく別の話になってくるんです。もちろん目指すべきところではあると思うんですけど、個性をつける、キャラクターづけっていう範囲を超えているんですよ。個性のある団体って、もともと持っていたものとか、長いことかけて作り上げてきたものぐらいしかないんです。

——蓄積ですね。

リンダマン 歴史か、何か瞬発的に運よく持ちちゃったもの。話題性なんてそうじゃないですか。何かがハマったとかね。ウナギ・サヤカという人はその話題性っていうのをちゃんと自分のキャラクターにしている。ああいうのは凄いなと思います。でもあれは、個でしかできない動き方だし。コンプライアンスとかをある程度遵守しつつも、個人だったら遵守しなくてもいい部分もある。それが団体の場合、大きい会社になるほどそういった個性を作るのが難しくなる。その中で、人それぞれの思想があっていいとは思いますが、やっぱりベースの部分上げていくことを、みんなが目指して行ってほしいですね。それが技術なのか、能力なのか、あるいは集客力なのか、パワー、見た目なのかは各自違うだろうけど。

——個性という点では、GLEATの選手はみんな立っているんで、その面白さがもっと伝わらないかというのはこの数ヵ月見続けて思うところなんです。それが内側と外側の熱量の乖離になっている。

リンダマン だとしたら、伝え方のベースを上げていくのも、これからやって



いかなきゃいけないことのひとつです。そこはトレーニングと同列のものです。やったところで、一発で集客につながるかはわからないという意味で。逆にやっていなくても、つながる時はつながっちゃうし。それこそ上振れ下振れでいったら運や景気でポンポンと変わっていくものなので、そこに左右されずに落ち着けて言いたいんです。落ち着いて自分を見た時に足りている、足りていないが見えてくる。盛り上がったからOKじゃないんですよ、たまたま盛り上がっただけかもしれないんだから。

——これから先に関し、なんらかの可能性を感じているから続けられているんですよね。

リングマン 可能性があるから続けているように見えます？ 可能性がなかったら、やめていると。

——やめはしないでしょうけど。

リングマン でも、続けているってそういうことじゃないですか。

——可能性がなかったら、その可能性を広げるためのことをやり続けるでしょう。

リングマン 可能性がなかったら、広げられないじゃないですか。

——ゼロではないですよ。

リングマン ゼロだったら、やめると思います？

——そういう人もいるとは思いますが。

リングマン 僕に訊いているんですよ？

——そうです、だから可能性があるからこそ続けていると見受けられます。

リングマン なるほど、なるほど。可能性があるから続けているわけじゃないです。なくても続けますよ。続けて、ここで引退しようと思っています。35歳で引退したいと思っているから可能性がなくても続けて、GLEATで引退します。

——35歳で引退というのは、自分の中で決まっているんですか。

リングマン 決まっています。まあ、40までもあり得るけど、それはボーナス40であって。何か話が転がって40になることもありますけど、相当考えにくいです。

——着地点が決まっている上で、自分が何をすべきかを考えて今はやっているんです。

リングマン そうです。自分のいい死に方。

——可能性がなくても続けるという姿勢はわかりました。でも、この団体に対しなんらかの可能性は感じているんですよ。

リングマン 感じています。

——だとしたら広めていかなきゃならんです。

リングマン そうっすね。広げなきゃいけない。35歳以後もやる形になって、可能性がなかったらやめなきゃいけないですけど、35歳までは可能性がなかったとしてもやり切ります。

——古い言い方をするとGLEATに骨を埋めるつもりなんですよ。

リングマン 埋めるというか、好きだから。

——今のプロレス界はいくらでも選択肢がある中で、自分の所属している団体に対しちゃんと好きと言えるのは尊いと思います。

リングマン それを言うなら、みんな外に出て何がしたいの？って思います。

——人それぞれじゃないですか。

リングマン お金ですか？

——それも大きいのが現実でしょう。その中で、団体を応援しているファンが選手から聞きたい言葉は「好き」なんだと思います。だから、その思いがもっとリング上で表現されるとプロレスラーと観客が共有できます。

リングマン そうなんですよ。僕、ディズニーランドが好きだし、いろんなことに興味があるから落語が面白そうだと思ったりいくようにしているんですけど、ディズニーランドにいても「うーん、いいなあ」というテンションなん

ですよ。

——しみじみ味わってしまう。

リングマン それが人から見ると楽しそうに見えない。おまえといくと面白くないよって言われる。そうじゃねえんだけどなあ…って思うんですけど。リング上は、楽しいって言っているだけが楽しいじゃない。お客さんが手拍子しているから盛り上がっているわけじゃないとっていて、僕は手拍子ってマトモに受けちゃいけないもんだと思うんですよ。

——むしろ一人ひとりバラバラの方が真の感情が伝わりますよね。

リングマン そうそう。僕はシンドそうな顔はしていますが、シンドいことが楽しいと思ってやっているんで、そういうふうに見てほしいです。リングマンはベース楽しそうで、好きでやっている。だからやめていない。いろんなことを考えてもらっていいんですよ、娯楽なんだから。じっくり考えてみるのも、ライトに楽しむのもありなのが本来なんだろうけど、僕個人はじっくりと考えながら見てくれると嬉しいです。自分が若い時、そうやってプロレスを見ていましたから。

——エル・リングマンをじっくりと味わう。

リングマン ただ、スターってもうちょっとライトに味がするものだから、そこからも脱却していかなければならないのかもしれないんだろうけど。なので、コンビニで目につきやすいパッケージデザインから入ります。

春の頂上決戦、開幕

敬意と報復

2026 G-CLASS

FIRST ROUND 5.13 新宿FACE

SEMI FINAL 5.20 新宿FACE

FINAL 6.4 新宿FACE

エル・リングマン

山村武寛

石田凱士

KAZMA SAKAMOTO

T-Hawk

田村ハヤト

河上隆一

プラスチックJUN

G-CLASS 2026

■開幕戦 5.13(WED)新宿FACE ■準決勝 5.20(WED)新宿FACE ■決勝戦 6.4(THU)新宿FACE

■SRS席 ¥10,000 ■カウンター席 ¥10,000 ■リングサイド席 ¥6,500 ■指定席A ¥5,500 ■指定席B ¥4,500
※小学生以上有料 小学生未満は席が必要な場合は有料 ※当日¥500アップ
※入場時に別途ワンドリンク代¥600が必要になります。※SRS=スペシャルリングサイドは各方角1列目

お問合せ リデットエンターテインメント株式会社
エンターテインメント事業部 03-5219-7717 <https://ent.lidet.co.jp/gleat/>

O-テラ e+ イープラス ぴあ GLEAT プロレス 検索